

今月の

# PHOTO

Text=市井康延

## 山田なつみ [TOKYO (常世)]

# TALK



●やまだ・なつみ  
1980年、山形県生まれ。成城大学文芸学部卒業。2003年に渡仏し、Katja Rahlwesアシスタントを経て、ソルボンヌ・ヌーヴェル大学卒業。10年に帰国し福島に住む。東日本大震災で自宅が全壊し宮城県角田市へ移住。  
<https://www.natsoumi.com>

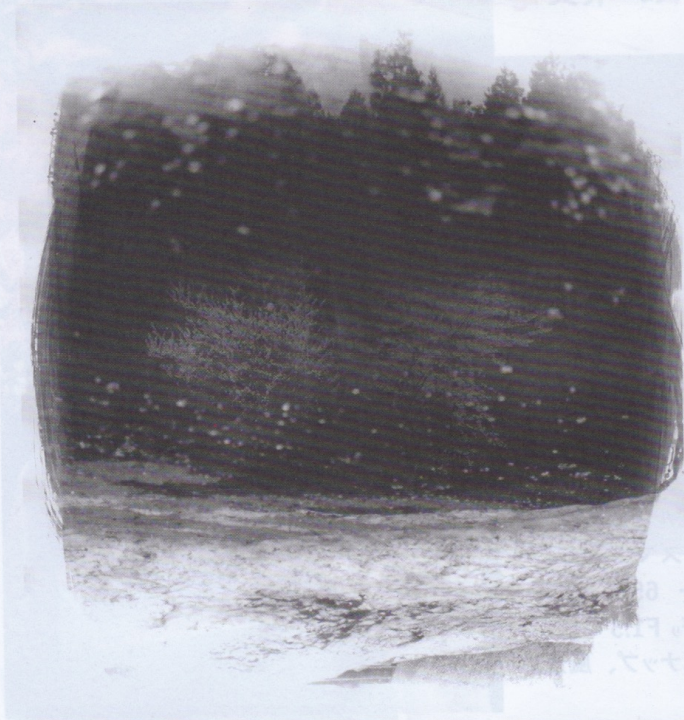
生と死が渾然一体となって立ち上がる自然の生命力を表現

山田さんは会津地方の町や村を訪ね、中判のフィルムカメラで撮影する。人物はプロニカETR、風景はペンタックス65を使う。2011年ごろから撮りためてきた写真で今回、写真集『TOKYO (常世)』をまとめた。ただし、そこに至るまでには紆余曲折と不思議な出会いがあった。高校時代は地元の単館映画館、フォーラム山形に足繁く通い、そこで数多く上映されていたフランス映画を見た。そこでフランスへの興味と、ファッションに惹き付けられる。「そうした世界をもっと知りたく

## パリから福島の子深い奥会津へ 民話や山岳信仰の中に見た生命の根源

て、大学に入ると、バイトの口を探し何社もの雑誌社を回りました」約3年間、『コンポジット』で働くことになるが、その雑誌を主宰する菅付雅信氏は写真に造詣が深く、内外の写真表現を紹介していた。「スタイリストで写真家のカーチヤ・ローウェ (Katja Rahlwes) を知り、彼女のアシスタントになろうとフランス行きを決めました」スタジオで撮影された写真を多く見てきた中で、ローウェのポートレートは自身の部屋を使い自然光で撮っていた。その写真から親密さと自由な感性を感じ、魅了された。ちなみにローウェは今も現役で活動中なので、興味ある向きは検索を。





生活費を稼ぐため、バイト先に選んだ寿司屋ではマグナム・フォートの写真家ゲオルギイ・ピンカソフと知り合う。場所は移民が多い19区にある大衆店で、トイレに行く通路の壁に目を惹く写真が掛けられていた。「ピンカソフは常連の一人でした。店長に紹介されてからは、店に来るたびに撮った写真を見せてもらった。写真について教わりました」

ある時から、来店する多様な人種のお客さんたちを撮り始めた。自分が何をすべきか悩んでいた時期で、目の前の人や風景を撮ることで自分を俯瞰し、冷静に見ることができたと言う。それは今も山田さんが写真を撮る理由の一つでもある。

「カーチャは『ファッシュョンは夢、イリュージョンだ』と言っていた。

対して、店で撮る写真は劇的でした。シェイクスピア劇のセリフにある『この世は舞台、人はみな役者』です」結婚を機に帰国を決め、住まいに選んだ福島県で予期せぬ美しい風景に出会った。雪深い環境から生まれ、た昔ながらの家や日々の営みだ。

「歴史的な建造物が今もある街としてパリに憧れていましたが、こんな近くにも素晴らしい風景があったことに驚きました」

思い起こすと、実家には写真好きだった父親が撮ったモノクロの風景写真が飾られていた。霧がかかったような曖昧で不思議な感じが気になり、繰り返し見ていた。

「プロニカも大学時代、父からもらったカメラです」

結婚後、二度、命を授かったが残念ながら流産した。その哀しみを癒すべく導かれたのが山だ。

「幼い頃、祖母が『人は死ぬと山に行き、そこから生きている私たちを見守ってくれている』と話していました。だから山に行くと、本能的に子に会える気がしたのです」

常世とは黄泉や不変の神域、理想郷などの意味を持つ。

「会津の雪に閉ざされた地に豊かな文化、日常を見ました。この中にすべての生命の根源がある、そんな写真集を作りたいと思いました」

有限の中に潜む無限をすくい取る試みだ。

■山田なつみ写真展「TOKYOYO (常世)」  
4/8 (木) ~ 26 (月)  
リコーイメージングスクエア東京



■写真集「TOKYOYO (常世)」特装版  
限定10部・私家版・26,400円(税込)  
写真集にはバライタ作品1点に手刺繍のシリアル番号が付く。ブックカバーは「生命の樹」をモチーフに作家のデザインを刺し子で仕上げた。

